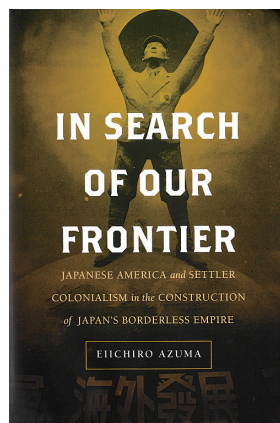


東栄一郎

『われらがフロンティアを求めて——日本の境界なき
帝国建設におけるジャパニーズアメリカとセトラ
ー
コロニアリズム』Eiichiro Azuma, *In Search of Our Frontier: Japanese America and Settler
Colonialism in the Construction of Japan's Borderless Empire*

廣部 泉



University of California Press, 2019

待望の一冊である。二〇〇五年に出版された前著 *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America* (Oxford University Press, 2005) が、多くの賞を受賞して以来、待ちに待たれた著者二冊目のモノグラフが本書である。太平洋を越えた移民や移住民に関する専門知の行き来や交流を通して、日系移民のセトラコーロニアリズムをめぐる複雑なトランスナショナル・ヒストリーを描くものである。トランスナショナル・ヒストリーの重要性が叫ばれて久しいが、実際に書かれた優れたトランスナショナル・ヒストリーのモノグラフはさほど多くない。本書こそまさしくその決定版といえる。

セトラコーロニアリズムは、もともとイギリス人の植民活動に

対して用いられていた概念であるため、当初は、入植者は白人、支配される側は非白人ということを前提としていた。著者は、その分析枠組みを修正して、移住民の主体も、支配される側も、共に非白人であった日本の植民活動に当てはめていく。アメリカへ移民し、白人に迫害された後、再度別の場所へ移民し、日本の植民地事業における入植の尖兵となった人々を描く。その結果、アメリカ帝国と日本帝国という二つの帝国を行き来する日本人を対象にすることになり、分析は帝国間関係へと及ぶ。

物語の舞台は、日本人が太平洋を渡って移民した一八八〇年代のハワイや北米から始まり、人種差別による彼らの帰国と共に日本へと戻った後、再度移民した先の満州や台湾、朝鮮半島や南洋

といった日本の支配地域へと移っていく。まず、日本からフロンティアを求めてハワイや北米大陸へと太平洋を渡った人々が描かれる。彼らは困難な状況に遭遇しつつも、農業経営者や実業家として成功する。しかし、そこは白人が社会の頂点を形成するアメリカ帝国の一部であった。それ故、日系移民は、成功したがゆえに排斥される。その過程は中国系のと違った道をなぞるものであった。しかし、日系人が中国系と違ったのは、祖国が帝国を形成しており、帰国しその支配地域へ赴けば支配する側に立てたという点であった。彼らは、アメリカのフロンティアで身に付けた大規模農業などの新しい専門知によつて、満州や台湾などで植民の「先生」としてふるまうことができたのである。

当初は、太平洋を越えてハワイやアメリカ西海岸に向けられていた日本人の植民のまなざしは、アメリカで人種差別に遭遇するにつれ、南米や中国大陸、南洋へと向けられていった。その過程で本書は、これまで多くの歴史研究者が重視してこなかった、日本国内の移殖民指導者に、多くのアメリカからの帰国者が含まれていた事実注目する。そして米国で身に付けた様々な専門知とアングロサクソンの人種主義下での体験が、彼らの後の植民活動に大きな影響を与えていたことを明らかにする。太平洋を越えた彼らの体験が、大陸や南洋における日本の帝国形成に寄与したと、著者は大胆な仮説を提起する。日本帝国の境界の外に位置し

たため、日本帝国研究の視角からは外れてきた、アメリカの人種主義と移民排斥を日本のセトラークコロニアリズムの展開における重要な要因とするのである。ハワイやカリフォルニアへの移民に起こったことが、日本の国家としての世界に向けての拡大や世界的な人種闘争に関する議論に影響を与えたのである。典型的に見えるのがサンフランシスコの移民知識人で、彼らの議論が日本帝国の征服すべき「フロンティア」の原型を見せてくれる。のちに国家主導の大陸植民地化において立ち現れる日本のセトラークコロニアリズムの原型がそこに見て取れるし、そこには初期の日系アメリカと帝国日本との間に緊密な協力関係があることを著者は鮮やかに示している。

日系移民は、自分たちが人種的に優れているという自己認識を持ちながら、アメリカで白人至上主義の人種差別という現実に遭遇し苦しむことになる。彼らは、アメリカのフロンティア開拓者と自分たちを頭の中で同一視していたが、外から見れば人種差別に苦しむ存在でしかなかった。心の中では成功したフロンティア開拓者になれていた彼らであったが、土地所有を禁止され、帰化不能とされることで挫折する。

挫折した彼らの一部は、アングロサクソンの人種主義のないラテンアメリカへと向かう。また一方で多くが帰国の道を選んだ。しかし、彼らの動きはそこで止まらなかった。アメリカでの経験

から大規模農業などの知識を身に着けた帰国者たちは、フロンティア征服のアメリカ型モデルを実践する新たな日本の出先を模索することになる。

本書の魅力は、なんといっても膨大な一次史料を読み解くことで、太平洋を越えて行き来した歴史に埋もれた移民たちの失われたナラティブや記憶を救い出し、その複雑なアイデンティティを描き出すところにある。その好例は移民の軌跡にある。例えば、佐藤信元は、これまでの学問領域の縦割りによって、その人生も分断されて理解されてきた。アメリカ史の観点から日系移民を研究している研究者には、佐藤は日本からカリフォルニアへ渡った多くの移民の中で、農業で成功したものの、現地の排日運動の進展に伴い帰国した多くの移民の中の一人として理解されてきた。

一方、日本を研究対象とする研究者にとつて、佐藤は、日本から満州にわたって大規模農業で成功した指導者の一人として立ち現れる。太平洋を行き来した彼の人生全体を理解する著者は、彼が満州で実践した大規模農業の知識はアメリカでの経験から得たものであり、その心には、アメリカ的フロンティア開拓精神が宿っていたことを明らかにする。佐藤のトランスナショナルな行動の総体的な理解を阻んでいた学問領域の壁を著者は乗り越える。佐藤信元は、歴史事典に項目が設けられるような人物ではなく、日系人団体の名簿や満州の農業パンフレットに名前が現れる程度で

あった。そのため、一つの帝国から別の帝国へと移動しての彼の活動は、国境を越えて活動した佐藤本人と同様に、トランスナショナルな視点で国境を越えつつリサーチした著者の研究によってはじめて十全に理解されるのである。

そしてもう一人、佐藤虎次郎は、アメリカ西海岸に入りサンフランシスコなどで書生移民として過ごした後、ミンガンに辿り着く。しかし、そこには西海岸のような日系人社会は存在せず、白人による人種差別に直接さらされ挫折する。次に彼は、自身がアメリカで体験したような人種差別のない新たなフロンティアを求め、当時まだ忘れられた地域であったオーストラリア北部に入植する。そして、そこで真珠事業で大成功し、「キング」と呼ばれるまでになる。しかし、彼の成功も長くは続かない。オーストラリアの白豪主義によつて再び白人の人種差別の餌食となり、帰国せざるを得なくなつたのだ。帰国した佐藤は、新聞事業に乗り出し、そのなかでセトラークコロニアリズムを説いた。そののち、朝鮮半島を自らのセトラークコロニアリズム事業の舞台と定め移住する。

ここで重要なのは、彼らはアメリカを離れた後も、常にアメリカの日系人排斥運動を注視しつつ行動していたことである。佐藤虎次郎は、アメリカで迫害された経験から、アメリカ白人のように地元住民を排除したり抑圧したりするのではなく、家父長的同

化を目指した。アメリカでの移民を経験し、それからアジアの植民に転じた人々に共通するのは、アメリカを離れたのちも、常にアメリカのフロンティア精神を抱き、それを準拠軸としたことである。世界のどこで植民事業に携わっても、彼らはアメリカ的フロンティア開拓精神と共にあつた。彼らのレファレンスポイントは、アメリカであり続けたのである。

このように、著者が見つけなければ、歴史に埋もれていた太平洋を越えたつながりを鮮やかに蘇らせる本書は、これまで移民が如何にしてアメリカ人となるかといった側面や、いかに差別と闘ってきたかという公民権獲得の側面に焦点を当ててきたアメリカ（とその影響を色濃く受けた日本）のこれまでのエスニック・スタディーズの枠を超えたグローバル・ヒストリーの新しい形を提示した傑作である。
